

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

| | | | |
|-------|-----------------------|-----------------|-------------------------|
| 課題番号 | 19107007 | 研究期間 | 平成19年度～平成23年度 |
| 研究課題名 | 資源利用と闘争回避に関する進化人類学的研究 | 研究代表者 (所属・職) | 山極 寿一（京都大学・大学院理学研究科・教授） |

【平成22年度 研究進捗評価結果】

| 評価 | 評価基準 |
|--|--|
| | A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる |
| ○ | A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる |
| | B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である |
| | C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である |
| <p>(意見等)</p> <p>本研究の目的は、「霊長類学、先史人類学、生態人類学の3つの異なる学問分野から、人類が示す資源利用とそれをめぐる闘争回避の方法がどのような進化の過程をたどってきたかを再構築し、人類に最も適した方策を検討する」ことである。</p> <p>これまでにこの目的に沿った重要な進展があり、研究は概ね順調である。特に、類人猿とオナガザルの祖先の森林内での共存の可能性、ゴリラとチンパンジーの間に見られる補助食物の利用様式の相違、農耕民と狩猟採集民に見られる場所認知と所有の解決法の相違という知見は、従来の定説を覆すものとして高く評価できる。また、研究成果の社会・国民への発信もよく行われている。</p> <p>一方、新たな取り組みであるストレスホルモンの分析、父系解析および血縁関係のDNA解析、食性の安定同位体分析が遅れている。また、生態人類学班の学術論文（英文）が不十分である。これらの課題については、今後一層の努力が必要である。3つの研究組織は本研究の強みでもあり弱みでもある。強みを活かして、得られた成果を各分野だけに留めることなく、それらを有機的に統合し、「狩猟仮説」を超える新たな仮説の提唱に期待したい。</p> | |